昭和夢草紙

滝田ゆう

和夢草紙

滝田ゆう

新潮社版

昭和夢草紙

昭和五十五年二月二十五日発行
昭和五十五年四月三十日三刷

著者　滝田ゆう

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
振替東京四―八〇八番

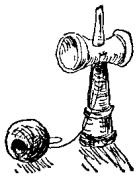
印刷　大日本印刷株式会社

製本　大口製本株式会社

定価一一〇〇円

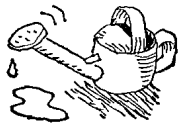
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Yu Takita, Printed in Japan, 1980



目次

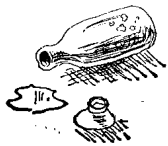
幻の町よ……　6
スマ子のいる酒場　8
豆腐屋の朝　10
山が消えた……　12
ほつれ髪　14
暖簾　16
月明かりの二人　18
雨の三番館　20
火葬場の気分　22
煙管の主　24
お下げの花ちゃん　26
白頭巾のアイツ　28
ヒモの繰り言　30
小舟に乗って……　32
チンドン屋さん怖い　34
ウメ割りに虹を見た　36
カレーの残り香　38
彼女の行く先　40
男の花道　42
かすりの大将　44



男の泣き場所 46
お灸の染み 48
闇夜の青電 50
わが町工場 52
トイレット妄想 54
二人の事情 56
アメアメフレ…… 58
タマやァーい…… 60
誰もいない町 62
二階のシーちゃん 64
うわさの酔っぱらい 66
ああ、スパルタ農場 68
三時のおにぎり 70
男一匹流れ唄 72
道端にて 74

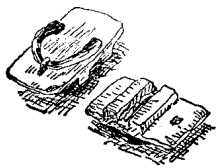
たそがれ映画館 76
飲み屋の小倅 78
屋根づたい 80
辛抱の頃 82
雪が降る…… 84
チンチン電車 86
あがきの哲学 88
汝、壊すなかれ 90
酔いどれ行進曲 92
初体験 94
氷割り 96
うしろ姿 98
聖しこの夜 100
定九郎慕情 102
物干しばなし 104

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



もんじゃ焼き 106
股火鉢 108
団地の子守唄 110
目覚めて候 112
雪明かり 114
五臓の疲れ 116
凸凹コンビ 118
ああ、女学生…… 120
野良犬がゆく 122
やさしいおじさん 124
御飯を炊く 126
ハモニカ少年 128
水溜りの町 130
再び防空壕…… 132
冷たい煮込うどん 134

ご両人登場 136
仏壇のある部屋 138
故郷の廃家 140
買い食いの頃 142
湯気の向うに…… 144
ガチャン 146
汲み取り時代 148
サボリの気分 150
関所の夢 152
本日検診日 154
パジャマの恨み 156
茹でタマゴを想う 158
夫婦喧嘩のこと 160
昼下がりの彼女 162
荷車の往く風景 164



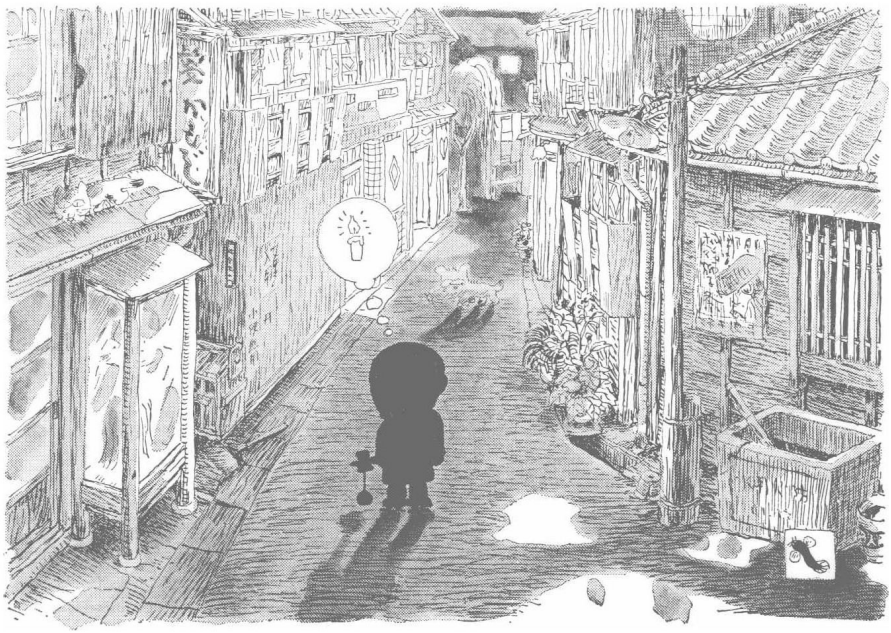
名物おでん 166
相撲少年の頃 168
罪のない連中 170
横丁のイイ女 172
虚ろな家 174
学生アルバイト 176
腸チフスの頃 178
花あらしの頃 180
裏町バス通り 182
土手伝い 184
たそがれ銀座通り 186

キヨシのおやじ 188
下駄は履物 190
たそがれアパート 192
キヨシの反省 194
下町のお坊っちゃん 196
おぼろな一夜 198
常連のクーさん 200
お医者さんゴッコ 202
思い出ホロホロ 204
夢まみれ…… 206

昭和夢草紙

幻の町よ……

なにやらじつに歯痒いではないか。あれだけ色濃く、鮮明に思い出されたその町の、いざとなると、やたらモーローとして推理の手掛かりさえつかめぬ。そして、やがて苛立つそのあたりは、やっぱりその場に戻れぬ焦りの空間。ままよ、変らぬままに、その町並みのあったにせよ、まずは、もう子供にはかえれない。その当たり前の理屈に腹の立つのをなだめなだめ、今はひたすら奥歯かみしめ、顎の痛みを瞼の裏にしばたいて、こりゃもう、残るは臭いだけが頼りの闇夜のまさぐり……。とまあ、なにやら先行き思いやられるけど、ここらが昭和夢草紙。あっちへぶつかり、こっちへはねか



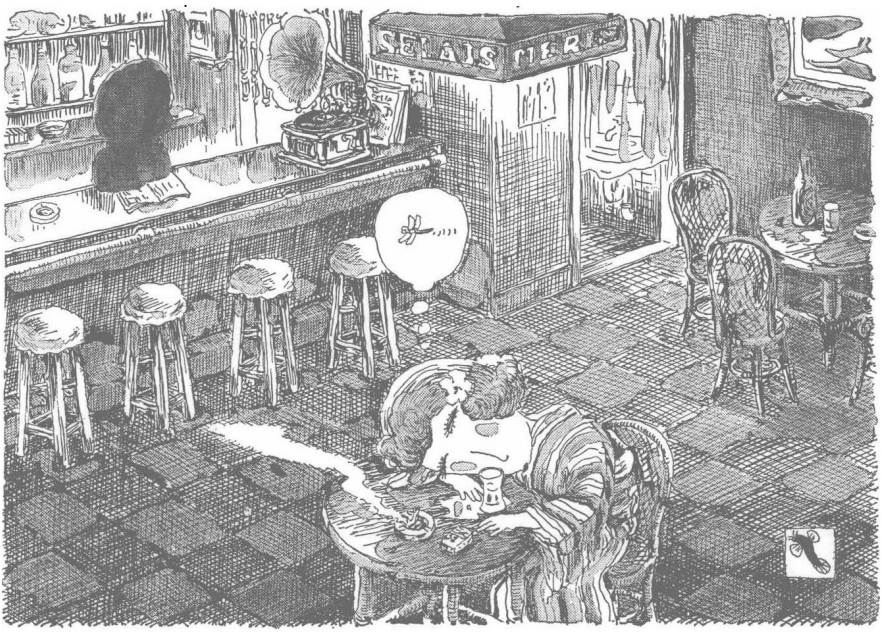
えりしながらも、すでにぼくはその町にいるのだ……。
町にはそれぞれいろんな臭いがある。
とりわけ裏町裏通り、横丁泥ッこ露地小路。
ドブ板ゴミ箱ハサミムシ。検診ボーフラ肛門科……って。ああ、育ち加減がわかっちゃうなあ。
だけど、そう。その町にはそういう臭いがあった。子供の頃、夢中で駆けずりまわってた、あの幻の町の臭いだ。そこには、その風景の一部として、いつもおどおどしている、飼い主不明の犬がいて、町の臭いはその犬にも染み着いている。犬はいつからか町の住人といった風情で周囲に馴染んでいるが、つねに、その犬なりの分を心得ているあたり、まこと見上げた心根というべきか。
ここでぼくはふと思うのだが、そも、分相応こそは庶民の身上。となれば、人間さまもこれに慣らって、あれやこれやのノーガキこかずと、まずとりあえずしっかり三食。チャブ台囲んで、本来の暮らしのうるおい再認識すべきじゃないでしょうか。
ともあれ、町の臭いはそのあたりから臭ってくる。そのいかにも人間臭い生きざまが臭ってくる。ムグ。臭ってくるのだ。
ハハハ。なにやら一人で悦に入ってるが、一体ぼくはこの町にどれほどの執着をもってやって来たのか。やっぱりかえらぬ子供時代が恋しくて、そぞろ気ままにさまよい込んだだけなのか。いえ、そうではないのです。すべてはここからはじまるのです。
いうなれば、ぼくにとっての出発の町。その町を、今、ぼくはぼくなりの歩幅で斜め斜めに歩いていく。なにかを忘れた。どこかで朽い残した。それがなんだったか。それを探しに、ぼくは鼻の穴煤だらけにしながらエンエンとこちら目差して歩いていくのだ。

スマ子のいる酒場

夜霧の迷路のド真ッ中から、突然その酒場は出現した。ムグ。ぼくはその酒場に何度か来たような気がする。

そこにスマ子という、いつも縞模様の着物を着た女がいるとしよう。スマ子は大抵酔っ払っていて、おそらく、ふり同様の客の顔などは覚えているわけもなく、看板時分には、一人テーブルに俯っ伏してぴくりともしない。もっとも、その頃はひょっとすると、外はもうそろそろ夜も明けようかといった按配で、いつかざわめきも遙か彼方に、店には客の姿はなく、周囲の壁の安ペンキの臭いだけがあたりに漂っていて……。

酒場のスマ子は、本当は島子というの



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が正しい名前らしい。客はもっぱらスマ子と呼んでいるが、酒場の女主人は彼女をシマちゃんと呼んだりもしていた。どちらかといえば、ぼくなどはスマ子よりシマちゃんの方が親しみやすい。しかし、島子がなまるとスマ子になる。となれば、そういう気分のスマ子も満更親しみわかぬものでもない。

「スマ子……」

「ナァヌ？」

「グフッ。なんでもない」

「ンま。おかすげな人」

とまあ、そんな具合に、やがてホロホロと打ち解けるときも間近い二人だが……。ハハハ。

それもひとときの妄想というやつだ。ともあれ、ぼくは島子の思い入れよろしくスマ子と呼ぼう。スマ子の詳しいことはおぼろである。おぼろでよろしい。おぼろながらに、スマ子はいつからか酒場の花であった。夜毎他愛なく酔い痴れる。やっぱり淋しい花とも見えた。しかし、花はそれぞれ咲く場所心得て、ああ、それはそれ、やはり野におけ蓮華草……。けど、よく眠る花だ。

スマ子はテーブルにさっきのままの姿勢である。時計の音がいくつかゆっくりと鳴った。

かすかに線路の響き。客のいない酒場。安ペンキの臭い。そしてふっと隙間風……。

スマ子よ、風邪を引くぞ——。

と、スマ子は急に体を起こすと、いやいやをするように上体をゆすって叫んだものだ。

「ほっといて！　あたしはこれでゴハン食べてんだから……」

ムグ。いいセリフだ。どんな夢見てたか知らないけど、やけにじんと来る寝言ではないか。それっきりスマ子はまた眠ってしまった。夢の中へ帰っていったのか……。

豆腐屋の朝

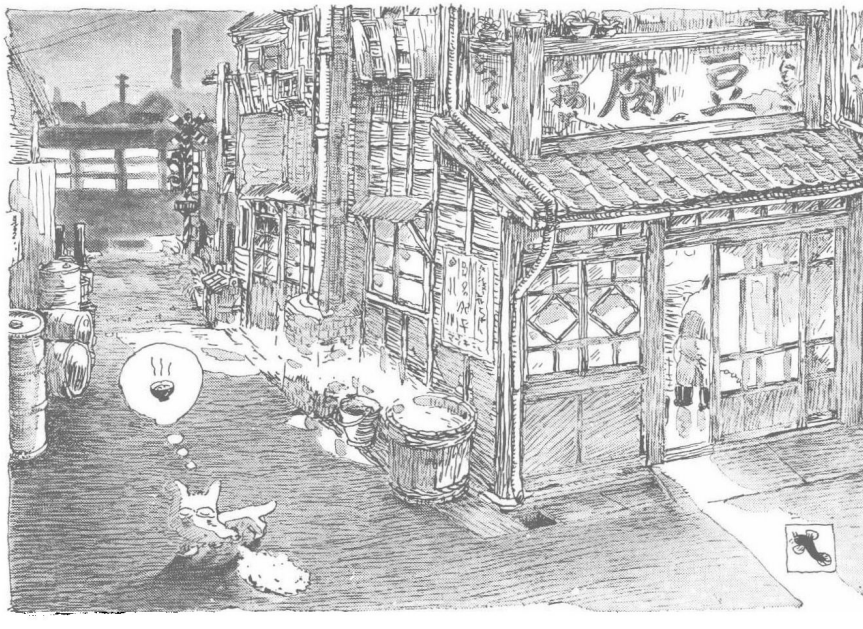
ケーン、ケーン、ケーン……。

無人踏切の警報機が鳴っている。始発電車が薄明かりの冷気の中をよぎっていく。

ケーン、ケーン、ケーン、ケ。

湯気が流れておからの匂い。今、出来立ての豆腐の匂い。白々明けの朝の匂い……。なにも豆腐は朝と決まったことはない。だが夕餉の湯豆腐もわるかないが、そこに豆腐屋がある限り、湯気はやっぱり朝一番。

働きもんの豆腐屋夫婦には倅がいて、うれしいことに、学校終えたら二代目継いでくれるとか、どうとかと。その頃にしても、町ではちょいとした美談だった



が、それがそうでもなくなったのは、やっぱり戦争のせいだったのか……。
しかし、いまだ頑固に手間隙かけて、立ちのぼる湯気の向うにおからの匂いの変わることなく。きらきらと水にゆらぐおトーフのあくまで白く、四角く……。
と、ここにてふっと思うこと。豆腐はなぜ四角なのか？　四角い型に入れるから。
「あっしゃね、まるい豆腐なんてマッピラでさ」
たしかにわかる、理屈嫌いのおやじの心情。なんといっても豆腐は四角。その一丁のあるがままの姿に心惹かれてこそ、まことニッポン人というべきか。ま、豆腐の元祖は中国だが、その文化的遺産がどうのこうの、成分だ、カロリーだと言ってるよりも、そもそも庶民の明け暮れは、朝の味噌汁が豆腐と決まれば、入れもの持って下駄つっかけて買いに行く。その行くというところになんとも生き生きとしたお互い庶民の生活がある。
ケーン、ケーン、ケーン……。
何台目かの電車が通るころ、やがて町は目醒め、まもなく入れもッ持った坊主頭の少年が、下駄を鳴らして朝もやの中、踏切の向うの横丁あたりからカタカタとやって来るのだ。
霜におおわれたリンゴのようなホッペタの少年は、籾殻みたいなジャケツを着て、半ズボンからはモモヒキ出して、そして白い息弾ませながら、鼻水一筋横殴りにひとはらい。
出来立ての大柄の豆腐が、水槽の中でスイッスイッと別れて、そして取り出される一丁。
すうっと横に包丁すべらして、あとは賽の目に縦横。トットットットット……。
「坊やどこの子だっけな」
「あそこの銘酒屋ッとこ、曲ったとこ……」
少年の指差す彼方は、再びもやに包まれて夢おぼろげにかすんでいる……。

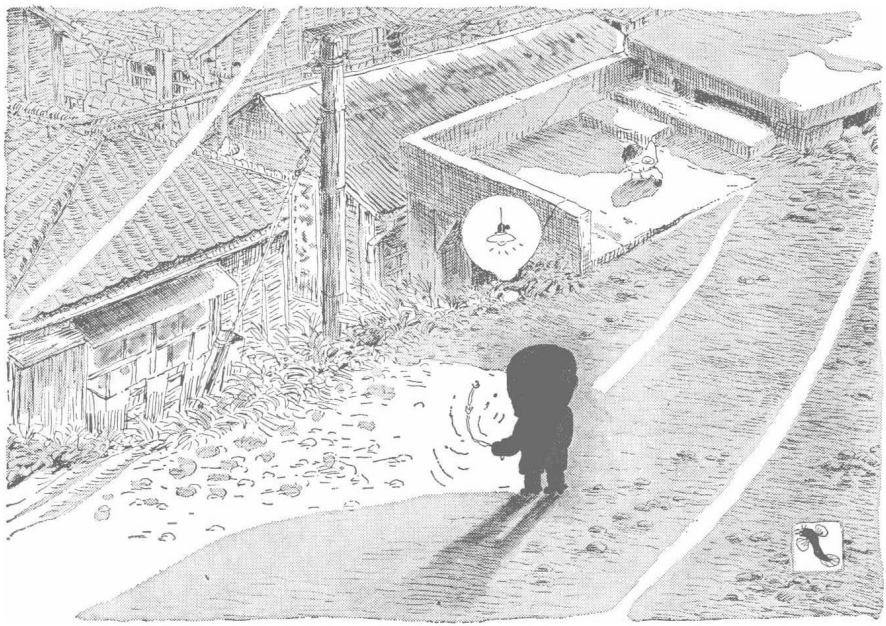
山が消えた……

そこに〝山〟があった。

山は大抵どの町にもあった。普段往き来している地ベタより、ちょっと高い地ベタ。それが山であった。原っぱや空地の一隅がこんもり盛り上がっていれば、すでに、原っぱや空地は山である。地元の住人は、誰しもそう呼ぶのである。

廃止になった高架線跡……。それはもうたちまちにして山であり、山はひしめく両側の家々に挟まれて、ひとしきりだらだらと続いている。ピューっと風が吹いて、山は、正月の凧上げにも格好の地形を残していた。

春には水雷艦長。悪漢探偵。駈けまわる足もとには、スミレ、タンポポなどの



類いが風にゆらぎ。夏場は雑草更に生い茂り、風がはこぶ草いきれ。秋は夕焼けの日暮れどき。帰りそびれて、ぼんやり立ちつくす頭の上にコーモリなんぞ急降下してきて……。

そして冬……。風が鳴いてる土埃の山……。

そうだ。それが山の匂いだ。風と一緒によぎっていく場末の臭い。

だが、やがて、山は次第に平べったくなっていった。端の方から、地ベタと同じ高さになっていった。そして山は、ついにノッペラボーな一本の通りになった。ノッペラボーはアスファルトで舗装され、両側には新しい家々が建ち並び、匂いは失せて、山の面影はなかった。ただ、北風だけがヒュルヒュルと、泣き声あげるように吹き抜けていった。

なにやら、あっというまの出来ごとのように思う。一瞬のうちに崩れて……消えた……。山よ……。ああ、やっぱり夢の山だったのか……。

と、ぼくは、ここにまたしても手掛かりを失ってしまうのだが、夢ッ中のその山は、そこにあるから登る山ではない。そこになくてはならない山なのだ。泣くによし、笑うによしの山だったが、どちらかといえば、泣くのが似合うその後ろ姿に、風も一緒に泣いてくれた。泣き虫のぼくは山が好きだった。わざわざ泣きに山へ行った。行けば自然に涙が溢れた……。

「クソッタレ婆ァ！」

なにも煙管の雁首でガツンとやらなくたっていいではないか。なにかというとすぐひっぱたく。そんなにぼくが憎いのか。

「オニババッ!!」

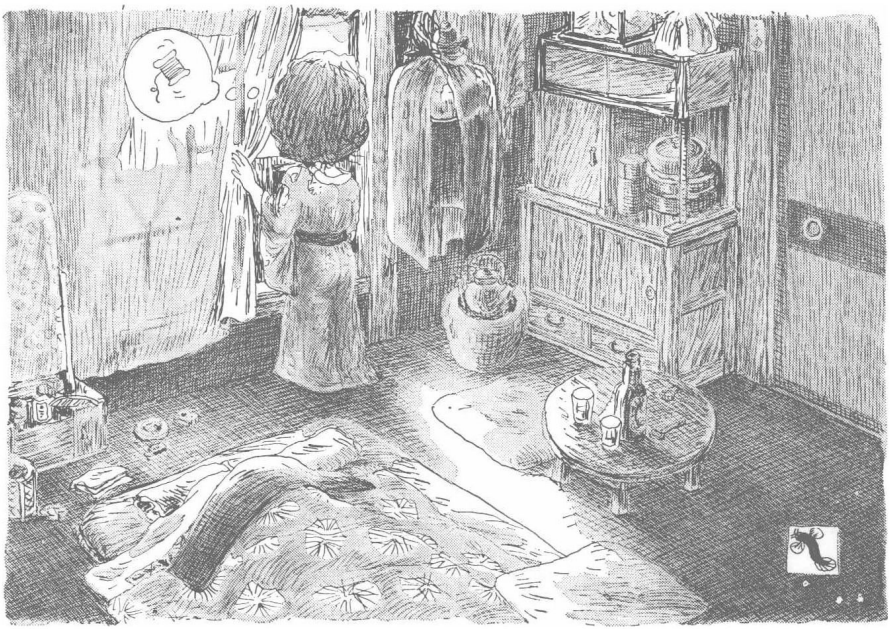
眼下の家の、窓ガラスの向うに白い顔がちらりと覗く。ちがうんです。おばさんのことじゃないんです。さっき見た夢のつづきなんです……。

ほつれ髪

なにやらハッと気がついて、目が醒めた……。

といっても、その場に至った、正しい経路を、ぼくはいまだに現実のものとして思い出せない。ただ、髪の匂い染み込んだ布団の襟の、意外と滑らかな感触と、女のかすかな温もりだけを唯一の手掛かりとして、遙かを振り返れば、おぼろながらも、ぼくはひととき、そのくすんだ部屋の見知らぬ客であった……。

ハハハ。なんとも陳腐な言い草ではないか。なぜ、ハッキリと、女郎屋にあがったと言わないのだ。どうして、チョンの間を嫌って泊りを決め込み、しかも、偶然とはいえ、初会のくせに回し部屋な



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com